帰属スタイルと認知的評価が否定的感情に及ぼす影響
—被攻撃場面に着目して—

○夢野来実
（流通科学大学人間社会学部）

目的

心理的ストレスモデル（Lazarus & Folkman, 1984 本明他訳 1991）では認知的評価と対処の結果，感情等のストレス反応が生じると説明している。この心理的ストレスモデルは対人ストレス場面でも適用可能である（加藤, 2001）。

対人ストレス場面とストレス反応である否定的情動の種類は，髙橋・松井（2009）が整理を行っている。同研究によると，場面は被拒否・被攻撃・加害・関係理解不能の 4 種類，否定的感情は悲しみや無気力・心配や不安・嫌悪やあきらめ・怒りやいらだち・動揺や恐れの 5 種類に整理される。また対人ストレス場面での認知的評価は，対処可能性・脅威・重要性が挙げられる（加藤, 2001）。

対人ストレス場面において認知的評価が否定的感情に影響するが，本研究では個人差変数，特に帰属の内在性がその影響を調整するのか検討する。出来事の脅威や重要性などを認知しても，原因の捉え方によってより相手を責めたり，落ち込んだりするなど感情の強度が変化すると考えられるためである。なお検討場面は髙橋・松井（2009）の被攻撃場面を用いる。同場面は他の対人ストレス場面の分類における対人葛藤場面に対応し（髙橋・松井, 2009），相対的に生起頻度は低いがストレスが強い（橋本, 2005）ためである。

方法

参加者　クラウドソーシングサイトにて募集した 195 名（男性 103 名，女性 91 名，性別不明 1 名;平均年齢 42.46 歳，$SD = 9.35$）が Web 調査に参加した。

手続き・測定項目　参加者には，相手に誤解されたり，一方的に責められたりしたという場面を呈示し,その場面での認知的評価と否定的感情を測定した。場面は髙橋・松井（2009）の被攻撃場面の特徴を反映したものであった。認知的評価は加藤（2001）の認知的評価尺度（対処効力感・脅威・重要性）計 9 項目で測定した。回答は 4 件法であった。否定的感情は，髙橋・松井（2009）の分類に基づき，悲しみや無気力・心配や不安・嫌悪やあきらめ・怒りやいらだち・動揺や恐れ計 17 項目で測定した。回答は 5 件法であった。また内的-外的帰属の個人差を，沢宮・田上（1997）の楽観的帰属様式尺度の負—内在性計 8 項目で測定した。回答は項目文の出来事に対し, 内的-外的どちらに帰属するかを尋ねる 2 択で測定した。また DQS 項目 1 項目を測定した。

結果および考察

各変数の記述統計量を Table 1 に示した。嫌悪やあきらめは α 係数がマイナスの値を示したため，項目を加算せず，あきらめおよび嫌悪として独立した変数として扱った。

帰属の内在性が各否定的感情に対する認知的評価の影響を調整するのかを調べるため，感情別に階層的重回帰分析を行った。目的変数に各否定的感情，説明変数に Step1 では認知的評価 3 つと負—内在性を，Step 2 では各認知的評価と負—内在性の各交互作用項を投入した。その結果，いずれの目的変数においても，各交互作用項の影響は全て非有意であった（$ps > .05$）。

本研究の結果，帰属の内在性は否定的感情に対する認知的評価の影響を調整しないことが示された。一方，嫌悪（$\beta = -.14, p = .028$）と怒りやいらだち（$\beta = -.26, p < .001$）は内的帰属をするほど感じ，動揺や恐れは外的帰属をするほど感じることが示された（$\beta = .12, p = .044$）。感情にはよるものの帰属は，感情の直接的な規定因である可能性が高い。今後の展望としてこの可能性の検証や他の対人ストレス場面を用いた検討が必要である。

Table 1
尺度別の得点平均、*SD*、α係数（n=195）

		平均	*SD*	α 係数
認知的評価尺度	対処効力感	1.78	0.60	.88
	脅威	3.49	0.58	.79
	重要性	2.77	0.81	.77
否定的感情	悲しみや無気力	3.28	1.00	.83
	心配や不安	3.42	1.12	.90
	嫌悪やあきらめ	3.22	0.81	-.02
	あきらめ	2.33	1.16	-
	嫌悪	4.12	1.15	-
	怒りやいらだち	3.68	1.11	.88
	動揺や恐れ	2.89	0.92	.74
楽観的帰属様式尺/負—内在性		0.58	0.22	.51

注）負—内在性は得点が高いほど, 外的帰属を示す